



Title	苫小牧研究林における樹木園の整備と維持管理について
Author(s)	及川, 幸雄; 三好, 等; 汲川, 正次; 佐藤, 智明; 本前, 忠幸
Citation	北方森林保全技術, 第24号, 27-29
Issue Date	2006-11-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73111
Type	bulletin (article)
File Information	2005-24_1-4.pdf



[Instructions for use](#)

I-4 苫小牧研究林における樹木園の整備と維持管理について

苫小牧研究林 及 川 幸 雄
三 好 等
汲 川 正 次
佐 藤 智 明
本 前 忠 幸

はじめに

苫小牧研究林では樹木園を整備して市民に開放しています。樹木園は研究林の顔であり、市民の憩いの場や、小中学生の自然教育などに利用されています。利用者の正確な数は不明ですが、年間数万人が樹木園を利用していると思われます。

樹木園は1982年より整備を始め、一般開放から二十数年が過ぎました。研究林を取り巻く諸事情も変化し、樹木園内の施設も老朽化が進んできました。この報告では、私たちが行ってきた樹木園の整備と維持管理について紹介します。

樹木園の整備

樹木園の整備は、事務所の近くを流れる幌内川に池や湿地を造成することから始められました。浅い沢底の平坦部に、大小合わせて8箇所の池や湿地が造成されました。池や湿地ができたことで、これまで少なかったトンボや水生昆虫が増え、生物相が豊かになりました。池はもともと川の氾濫原だった部分を掘り下げ、池尻に玉石を積んで堰を作り水位を上げて池にしています。掘り上げた土砂は整地に使用し、腐植の多い表土は敷き均して芝生張りに利用しました。

1985年には、樹木園整備の全体のレイアウトが決まり、1991年までに在来の樹木や灌木類をはじめ、本州および外国産の樹木約480種が植栽されました。樹木は産地別、樹形別のほか、葉の色などに分類して植栽し、灌木類を集めた灌木園、草本を集めた山草園なども造りました。

周囲の天然林ではモミジ、サクラ、コブシ等を積極的に残す施業を続けてきました。今では、春には花が美しく、秋には紅葉を楽しめる良好な景観が整備されています。



樹木園の配置



整備された景観

樹木園内の施設

樹木園内の施設として1986年にログハウスが、1989年にはあずま屋が完成し、樹木園を訪れる市民の憩いの場として使用されています。これらはいずれも人工林の間伐材を利用して建てられました。ログハウス内には学生の研究成果のパネル掲示や林内の鳥獣類の写真も展示されています。また、春の火防巡視員の監視小屋として使用しています。

あずま屋は林業技能補佐員が棟梁となり、冬の間自宅で小枝を使ってミニチュアを造り、用意する丸太のサイズや数量がすべて確認されました。そして、山仕事をする人間の技術と心意気を示そうと、大工鋸を使わず、チェーンソーだけで作業が進められました。さらに、金具や屋根の桤板まで自作して葺き、すべて職員の手で造られました。屋根には和歌山研究林から送られた杉皮を貼っています。



あずま屋

樹木園内には木製の橋が6箇所あり、そのうちたいこ橋が2箇所あります。橋桁には太い丸太を使用していましたが、設置から十数年で腐ってしまったことから、掛け替えの際にはH鋼を使用しています。H鋼の加工にも職員の技術が生かされています。板材は間伐材のカラマツを利用しており、直営で製材しています。板は約1cmの隙間を空けて打ち付けてあります。この隙間で落ち葉などのゴミや土が溜まりにくくし、通気性もあるため板材を長持ちさせることができます。たいこ橋は、林内で見つけた湾曲したカラマツ材を橋桁に利用しています。そこに、直径12cmくらいのカラマツの間伐材を半割にしたものを打ち付けてあります。手すりにはトドマツ材の13cm程度のものを使っています。これらの木材は、皮がむきやすくなる5～6月に切り出し、陰干しをしてから防腐剤を塗っています。



ログハウス

維持管理と被害対策

樹木は出来るだけ自然な樹形を保つような剪定を行い、枯れ枝や折れ枝、徒長した枝、胴吹きした枝など不要な枝を除去する程度にとどめ、刈り込み等の剪定は行わないようにしています。ツル性の植物は鉄製のパーゴラにのぼらせて展示していますが、鉄に木材を沿わせてツルが直接鉄に触れないようにすることで、枝枯れを防いでいます。また、降雪の遅い苫小牧では土壌凍結が起こるため、凍上に弱い樹木は根元に古いカーペットを敷き、凍上を抑えています。



凍上防止のカーペット

近年エゾシカによる被害が全道的に問題となっていますが、苫小牧も例外ではありません。樹木園では、イチイに対する被害がとくに多く、葉の食害、樹皮剥ぎ、角研ぎ等の被害が出ています。なかでも、小さな木は葉がすべて食われてしまい壊滅状態となっています。その対策として、大きな木は、幹に金網やネトロンシート等防護ネットを掛けることで、樹皮剥ぎの被害を防いでいます。

利用者の安全対策

スズメバチやヒグマなど野生動物による危害、倒木や枝の落下、駐車場での車上荒らしや変質者等、利用者にとっていろいろな危害が考えられます。その対策として、ヒグマについては出沒の情報を掲示板を使って、出沒箇所を入林者に知らせています。ハチの被害に対しては、歩道の刈り幅を拡げることで、人とハチの巣の距離が保たれるようにしました。また、車上荒

らしには、駐車場の並木の枝打ちを行い、事務所から車が見えるようにしました。そして、車の中にバッグや上着など、貴重品を置かないよう呼び掛けています。



ヒグマの出没状況を知らせる掲示板



新設されたバイオトイレ

まとめ

樹木園では、空き缶やコンビニ弁当の袋などを捨てる人がいますが、そのゴミを散歩しながら拾ってくれる利用者も多く、園内はいつもきれいな状態となっています。しかし、試験地内での山菜採取など利用者の中には研究林を良く理解されていない面もあります。

今後は、樹木園を市民との交流の場とし、研究林をより理解してもらうために森の案内人を置き、森林資料館の公開、森林を題材とした公開講座を開催するなど、研究林から、地域へ働きかけ、市民との新たな関係を構築することも必要だと思えます。

2005年11月には苫小牧市によるバイオトイレが駐車場奥に1基完成し、身体障害者用のトイレも完備されました。また、携帯電話も使えるようになり、ますます利用しやすくなってきました。今後も樹木園が研究林の顔として、市民に親しまれるよう、樹木や芝生の手入れと、景観作りに力を入れていきたいと考えています。